



学校での紙漉き

ミツマタのへぐり

漉いた和紙

津山の人・物・技術
など、明日誰かに自慢
したくなる津山のいい
ところを紹介します

14
つやまじまん

ええとこ
いっぱい 津山 自慢

世界に一つだけ 手漉き和紙の卒業証書(高田小学校)

1年生から地域の伝統工芸「横野和紙」を学ぶ高田小学校(下横野)。6年間の総仕上げは、平成19年春から始まった、子どもたち自身が漉く手漉き和紙の卒業証書です。郷土愛を育む学校全体の取り組み、世界で1枚の卒業証書に込められた思いを紹介합니다。

心を育む大切な経験

毎年、全児童が学校の紙漉きセットで手漉きを体験します。児童に教えるため、赴任した先生は、重要無形文化財保持者で、上田手漉和紙工場の上田繁男さん(上横野)に半日間の研修を受けます。5年生になった児童は、上田さんに直接手漉きを教わり、和紙の原料「トロロアオイ」の栽培・収穫、「ミツマタ」のへぐり(黒皮をそぐ作業)、川ざらし(川の水にさらしてあくを抜く作業)を体験します。育てたトロロアオイは、その年の卒業証書に使われます。植月美穂校長は「自分たちの地域はすごい」と感じる体験は、自分に自信を持ち、未来に向かって前向きに進んでいく力につながる。原料を作る人、紙を漉く人など、和紙について学ぶことで、人とのつながりの大切さや温かさも感じながら、子どもたちは日々成長している」と言います。

毎年楽しみな子どもとの出会い

手漉きを指導する上田さんは、「中学校に進学後、地域産業の学習で訪れた高田小の卒業生が、他校出身の友だちに自慢している姿を見るとうれしい」と話します。「地域の産業に触れてもらいたい

とがうれしいのはもちろん、毎年いろいろな子どもに会えるのが楽しみ」。一生懸命に取り組む児童の側で優しく見守ります。

上田さんは、児童が3回に分けて漉いた紙を重ねて1枚にし、乾燥させ、A4サイズに裁断して学校に運びます。「一人ひとりが漉いた大切な紙を間違えないよう、学校に渡すまで緊張する」。

世界に一つだけの卒業証書

紙漉きを終えた6年生の河野友哉さんは「漉き枠にすくう時が一番緊張した。1回目は難しかったけど、3回目にはコツが分かって上手にできた。薄い金箔を挟むことができるのは横野和紙だけ。すごい技術が津山にあることを知ってびびりした。自分で漉いてみて、さらにすごいと思った。世界で一つだけの卒業証書ももらえるのが楽しみ」と笑顔で話しました。漉き上がった和紙に今年の卒業生18人の名前を1枚ずつ筆で書き、最後の仕上げを拍う植月校長は「子どもたちの一生懸命な姿を見て、わたしも頑張らなければという気持ち益々強くなつた」と気を引き締めていました。卒業証書は、3月22日の卒業式で、子どもたちに渡されます。

つばき 編集室

1月号のつばきで書いたしづんぎ座流星群の前に、ふたご座流星群を撮影しました。準備の間にいくつかが流星が見え、どんな写真が撮れるのかと高まる期待。連続でシャッターを切るよう設定し待つこと2時間、きれいな星空は撮れたものの、残念ながら流星は写らず…。次回は設定を変えて挑みます！(☆)

津山自慢で紹介した高田小学校卒業証書。子どもの緊張した表情と、作業後のほっとした笑顔が印象に残る取材でした。漉き方でどこどころ厚さが違うのも、自分が漉いた紙だけの味。額に入れて飾る家もあるそうです。見る度に、漉いたときの緊張感や一緒にいた友だちのことを思い出すんだらうな。(〇)

ポートアート&デザイン津山見学会を取材し、館長が語る建物の魅力に参加者の皆さんと聞きました。100年前当時の銀行だったことを偲ばせる一枚板のカウンター、屋久杉を使った天井の装飾、赤レンガの壁。自然光を生かした展示空間…。何度訪れても飽きることがない魅力を再発見できました。(三)